



お試しビーガンの1月と、動物愛護のための認証制度

今月、ドイツで Veganuary (ビーガニアリー) という言葉をよく見かけた。これは Vegan (ビーガン=完全菜食主義者) と January (1月) を組み合わせた言葉で「1月は肉を食べないビーガンになろう」運動である。イギリスで2014年に始まり、年々広がっている。

ベジタリアンは肉は食べないが、牛乳、ヨーグルトなどの乳製品や卵は食べる。一方、ビーガンは乳製品も卵も食べない完全な菜食主義者である。健康や動物愛護の観点からだけでなく、最近は環境保護や気候保護のためにビーガンとなる人が増えている。

この運動を呼びかけている団体ビーガニアリーによると、肉を減らしたいと考えている人に1ヶ月という期間を区切って気軽に試してもらおうというもの。昨年1月は世界209カ国で58万人が参加したという。2017年は10万人程度だったから倍々の勢いで増えている。スーパーやレストランと協力して新しいビーガン商品の開発やワークショップも行なっている。例えばディスカウントスーパーのアルディやリードルをはじめ、マクドナルドやネスルなど大手企業も参加している。

ドイツでは人口8320万人のうち約10%がベジタリアン、2%がビーガンだという。さらに半数以上(55%)が、肉を意識して減らしていると回答している。特に15歳から29歳の若者は、他の年

代と比べてベジタリアンやビーガンの割合が倍で、その7割が女性だという。

気候保護運動の影響で子どもにベジタリアンが増えており、息子のクラス(中3)でも26人中4人がベジタリアンで、全員女の子。「動物がかわいそう」「肉は気持ち悪い」「環境のために食べない方がいい(家畜が出すメタンガスが温暖化につながる)」などさまざまな考えによるという。

学校生物センターのヨークも17歳からベジタリアンになったが、理由は牛の飼育と屠殺の様子のひどさを見て肉を食べる必要はないと決意。もう40年になる。

ベジタリアンのママ友はグミもゼラチンが入っているので食べないし、革製品も買わないなど動物の製品をすべて排除。一方8年間ベジタリアンだった別の友達も、今は肉もときどき食べる。振り返ると体も冷えていたし、体調も悪かったため「20代、30代でベジタリアンの人には、やめるようすすめたい」と話す。

ドイツでは日本よりもずっとベジタリアンが多いが、もともと肉をよく食べる食生活の反動だと感じる。ドイツのベジタリアンは何を食べているのか。大豆や穀物を原料にしたベジタリアン用ソーセージやハム、ハンバーグをよくスーパーで見かける。肉のかわりに焼いたナスやズッキーニを挟んだバーガーもある。

ところで2019年4月より、大手スーパーの肉に飼育方法についての認証が



パックの右下に家畜の飼育法についての認証シールが貼られている

ついている。動物愛護の観点から生産者、卸業者、大手スーパーが自主的に開発したもので4段階で表示。1が法律で認められている最低限のレベルで、4は屋外に出たり小屋内での一頭あたりの面積が広いなど最良の条件となっている。この認証は2022年1月から牛乳など乳製品にも付けられている。

しかし動物愛護の度合いは飼育方法だけで判断できず、国による包括的な認証制度が必要だと意見が出ている。生産者からも「家畜をよい条件で飼育したいのはもちろんだが、その分のコストが負担されるしくみが必要だ」という声があり、農業経済相は今年中にも家畜飼育に関する認証制度を整備すると発表している。それにしても写真のように牛肉は500グラムで350円、七面鳥のひき肉は400グラム300円程度とドイツは肉が安い。もっと高くして消費量を減らし、飼育の質を高めるべきという人もいる。

肉を食べるか食べないか、そして食べるのならどのように飼育された肉を食べるのか。このようなことを考えるようになるのも、社会がそれなりに成熟してきたからだろう。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録

アクトバットショー出演のためAさんが日本からやってきました。Aさんはディアポロ(お椀を二つつなげたようなコマをヒモで操る)のプロ。4年前の来独の際、私が通訳したのが縁で、当時、明は玉を3つ使ったジャグリングを教えてもらい「Aさんと同じ髪型にする!」というほど憧れていました。

その後、体育の授業でジャグリングがあった時、明は先生よりもうまかったため、皆の前で見本を見せるように言われたほど。そのAさんがまたショーのため訪れ、4年ぶりに再会しました。167センチになった明を見てAさんは「4年

前はあんなに小さかったのにねー」。明は技が上手になったとほめられ、照れながらも大喜び。

体育で習った技(1つを上からつかむ)をしていたら「日本では見たことない」とのこと。学校で習うようなありふれた技が日本では珍しいとは。また「二の腕と上半身は安定させ、肘から下しか動かさない、同じ位置に投げられるようになれば受け取るのは自動的にできる。リズムよく上げれば3つできる、そして玉を高く上げれば4つでも5つでも可能になる」とこつを教えてもらい、明は玉を4つ使った技に挑戦中です。実はAさんの名前も「あきら」。漢字は違いますが、2人のあきらが並んでジャグリングをしているのは楽しい光景でした。